

## 南相馬初のワイナリーをめざして

コヤギファーム代表取締役 三本松貴志さん



インタビュー日時：2023年9月26日

インタビュー場所：コヤギファーム納屋

聞き手：大竹統也、發田紗織、関口実和、綱島和樹、前川直哉

### プロフィール

生年月日：1973年5月19日（インタビュー時50歳）。

小高出身。相馬農業高校を卒業後、北海道の酪農学園大学に進学。大学卒業後は小高に戻る。震災当時の職業は酪農家、震災後は農家として小高でワイン用ブドウの栽培とワインの製造・販売を行う株式会社コヤギファームの代表取締役。ドローンパイロットの資格も持っている。現在は妻、19歳の息子、13歳の娘と原町区に暮らす。震災時、息子さんは幼稚園児、娘さんは生後半年。

## 1. 震災前の生活

### ★サラリーマンから酪農家へ

ーインタビューを始めさせていただきます。お父様が酪農を始められたと伺いました。

三本松：私の父が、小高商業（高校）が商業になる前、小高農高に通っていた頃。うちは田んぼと養蚕やっていたんですけど、父の代で酪農に切り替えて、そこから酪農をスタートしたって形ですね。

ーそのころ、ちょうど三本松さんは子どもだった、ということですね。

三本松：そうですね。私が生まれた頃は、ここの納屋の下のところにひもでくくりつけられて放置されてたって（父から聞きました）。今はもう建物ないですけど、私が生まれた時にそこに住居建てて。ここの一部が牛舎だったんですね。

ーそうなんですね。

三本松：牛7頭からスタートしたんで。田んぼと養蚕だったところから酪農に切り替えて。

ー相馬さん（相馬秀一さん、株式会社相馬牧場代表取締役）へのインタビューの際にも、酪農は初期投資がすごくかかるというお話を伺いました。

三本松：そのとおりですね。うちの父の代の頃は法律とかも緩かったんである程度許されたんですけど、今だとかなり厳しくて。牛何頭以上の場合、ふん尿を処理する建物とかを用意しなさいとか、そういったもので。大体、今スタートするとなると、やっぱり初めから1億くらいはないとスタートできないぐらいになってる。

ーお父さまは思い切って牛を始めたんですね。じゃあ、この辺りで牧草もやってらしたんですか。

三本松：今、ブドウ畑になってるとこは元牧草地です。

ー牧草地の前は桑畑だったんですか。

三本松：そうです。桑を開墾して牧草地にして、一部牛舎を造ってどんどん拡張していったっていう形ですね。

ーお父様がずっと酪農をなさっていて、ちょうど震災の年、2011年の1月に三本松さんへ代替わりなされた、とお聞きしました。

三本松：そうです。そのとおりです。

ーそれまでは大学を出られてから、小高に戻ってこられてたんですね。

三本松：小高に戻ってきて一般企業に勤めて。こっち戻ってきた時、酪農を継ぐっていう想定だったんですけど、うちの父親が、俺の力なんか借りっこないなんて言って。俺は大学へ行って学んできたんだ

から、取りあえず一人前になるまでは10年ぐらいの期間が必要だから、若いうちからやっておかないと切り替えする時にうまくいかないとか、うちの父が病気とかがで倒れて急にやれと言われても難しいって言ったんですけど、頑に聞かなくて。一般企業に勤めるなんて言ってたんですけど、私が33の時かな(2006年ごろ)。急に態度が変わって、「酪農をやるか、もうその会社に勤め続けるか、どっちかにしろ」っていう話をされて。

私が勤めてた頃は、日本中の企業が中国に進出して工場を建てるっていうご時世だったんで、こちらで地元とか他の企業に勤めようとしても契約社員とか準社員までもいかない状態で、3カ月に1回更新みたいなそういう時代。給料も上がらない、決まった金額しかもらえないっていう時代だったんで、うちの父がやるかやらないかってなった時に、自分で頑張ったら頑張った分だけ収入も上がるだろうって想定して、会社辞めて継ぐことにした。

—元々は、最初から酪農を継ぐつもりで大学に行っていたのに、いったんは企業にお勤めだったんですね。そして33歳の時にお父様からお話があって、酪農を始めたと。

三本松：うちの父の下で、要は見習いみたいな感じで。トラクターの使い方とか、牛の状態の見方とかっていうのをある程度口では言うんですが、1回言ったらあとはもう何も教えないみたいな感じで、分からなくてもそんな自分で調べろみたいなスタンスだった。

—ご兄弟はいらっしゃいますか？

三本松：妹が2人います。

—じゃあお父様は、やはり三本松さん(貴志さん)に継いでもらいたい、という思いがあったんですかね。

三本松：初めからそういう想定だったら、若いうちから覚えさせるって普通だったんでしょうけど、結局のところ、自分が思った以上に体が動かなくなってきたっていうのがあって、年には勝てなくて。だから、急にそういう言い方してきたんでしょう。

—なるほど。その頃、牛は何頭ぐらいいたんですか。

三本松：震災直前だと、大体、約60頭いて。それでも、うちは福島県内じゃ中堅よりちょっと下ぐらいだったんで。

—それも全部乳牛ですか？

三本松：乳牛です。

—相馬さんも、酪農、乳牛は休みがないというお話をされていました。朝から晩まで、とにかく搾り続けてらしたんですか。

三本松：そうですね。相馬さんのところは、多分、相双地区じゃ1番だったんで。

—頭数がですか？

三本松：頭数とか、機械化はもうだいぶ進んでたんで。

—三本松さんのところも、60頭でもかなりお忙しかったんじゃないですか。

三本松：そうですね。自分が、効率化でこうやったほうがいい、ああやったほうがいいって仕事の提案すると、父親は何にも言わないんですけど、母親は「お前、楽することばっか考えてっから、そんなことしか言わないんだ」って言って、全然意見受け入れなくて。だから結局言うの諦めて、代替わりしてから自分でやればいかと。

—それが震災直前の、ちょうど継がれる頃ですね。60頭を三本松さんと、お父様、お母様と、家族経営でやってらしたんですね。

三本松：はい。

—2011年1月1日に代替わりするというのは、何か理由があったんですか。

三本松：うちの父が、1月1日元旦でちょうど切りがいいから、そんな時からお前代替わりっていう話で。それで代替わりしたんですけど、2011年は3月に震災があったんで、そこからすぐ避難生活が始まった。

—じゃあ三本松さんが牧場の代表だったのは、2カ月ちょっとだけだったんですね。

三本松：2カ月ちょっとだけですね、ほんとに。

—三本松さんの中で、自分が継いだらこうやってみたい、という考えはありましたか？

三本松：取りあえず仕事の効率化は考えてましたね。

—それまでは、機械もたくさんは入れてなかったんでしょうか。

三本松：ちょうどその時、バルククーラーって牛乳冷やすやつを新しく買って交換したばかりだったんです。それだけですね、(金銭的に)ほんとに痛かったのは。フランスからわざわざ取り寄せて設置したけど、数カ月でもう避難っていう形でしたね。

—そういう機械って値段も高いですよね。

三本松：そうですね。うちはもう、父親が牛舎自体を全部手作りでやってったんで。自分も小学校の時にコンクリートをこねたりしてた。

—お父様の手作りで、ちょっとずつ設備を整えていくという感じだったんですね。

三本松：基本的に自分ができそうなところは全部自分で、墨出しとかやって。バーンクリーナーっていう牛のふんを中でコンベヤーみたいなので出すという機械があるんですけど、その溝を彫って水平出しして、それに合わせて板切ったりとか、そういうのを父親が全部やってた。自分はその頃まだ小学校とか中学校ぐらいだったんで、もの運んだりとかそういう手伝いはずっとしてた。今の子どもらだったら、日曜日とかだったらもうずっと朝寝てるっていうんでしょうけど、6時半ぐらいになったらもう起きろ、部屋掃除しろとか言われる生活だったんで。風邪ひいて学校を休んだとしても、家にいるんだから部屋掃除したり風呂掃除ぐらいできるだろうみたいな感じでずっと使われ続けてたんで。

—牛の世話だけじゃなくて、建物を造ったりもされてたんですね。

三本松：やっぱり業者に頼むとお金がかかるから、できる限りお金はためる。自分でできる範囲は自分でやるって感じでした。

—農家さんって、割とそういう方も多い印象です。農家さんなんだけど、もう半分大工さんみたいな方いますよね。

三本松：だから、納屋とかの棚とかなんかは、もうあり合わせの木とか端材でもう作っちゃって。取りあえず物乗っかってればいいぐらいの話なんで。

—もちろん業者さんが入った部分もあるんでしょうけど、牛舎は割とお父様の手作りなんですね。

三本松：そうですね。

—震災の時もそれを使ってらしたんですか？

三本松：そうです。

## 2. 震災当時

—震災のお話も伺いたいんですが、2011年の3月11日はこちらにおられましたか。

三本松：はい。

—代替わりもして、牛の世話をなさってたんですね。やっぱり揺れましたか。

三本松：そうですね。自分がちょうど浪江の郵便局の前にその時いて。軽自動車乗ってたんですよ。それで走り出した時に、車が変な動きするから、自分の車のタイヤがパンクしたと思ったんです。それで郵便局のすぐ隣に砂利の駐車場があるから、そこにいったん停まろうとして、停まった時に本震が来て。郵便局の近くにあった古い平屋の家が、上から何か圧力かけたようにつぶれて。上の電話線とか送電線が切れたり、地面から水が湧いたりとかして、大変でした。

—浪江の郵便局ですか。その時、どの辺にあったんですか？

三本松：駅のそばですね。

### ★被害の大きさ

—その後はどうされましたか。

三本松：これだけの地震起きたから6号線は通らないで山側で帰ろうって話をして家に帰ってきた時に、牛舎の一部の水を送るパイプが折れて水が湧き出ちゃって。それで温水作る機械の直結するところも壊れたんで、お湯が作れないって感じになってました。父親にはどこほつき歩いてんだみたいな感じでもの

すごい怒られて。その次の週が長男の卒園式でそのための準備とか、お礼になった人に何かやりたいからってうちの妻が言ってたんで、買い物の付き合いで浪江にちょっと行ってたと。

－浪江にいらした時は奥さまと2人？

三本松：子どももいたんですよ、ちょうど。4人でいました。

－お子さんも不安だったでしょうね。

三本松：そうですね。

－山側のほうを歩いてきたということは、津波を直接見たりはしなかったんですね。

三本松：津波とかは全然見てなくて。次の日、消防団の招集があったんです。ただ、牛の世話があるからそれ終わらないと参加できないので終わってから行ったら、小高の陸橋ががたがたになって。線路から東側がもう泥だらけ。6号線とか走ったんですけど、軽トラックのタイヤ半分、泥で埋まるような感じでした。

－11日のお話もう少し伺いたいですけれども、お家に戻ってきて、パイプなどが壊れていた。それを取りあえず応急修理したりとか、そういう感じだったんですか。

三本松：ガラスとかも一部割れたんで、ガラスの片づけを応急でやって。それで、夕方になったら牛の世話しなきゃいけないから牛の世話をしてたんですけど、あの頃はまだ余震とかあったんです。うちの妻と上の子どもは怖がってたんで、家の中じゃなくて車の中に避難させて、何かあったらすぐ逃げられるようにって感じでした。

－その時、ここは電気は通っていたんですか。

三本松：通ってました。

－水はどうでした？

三本松：水は井戸水使っていました。

－テレビとかは見る余裕はありましたか？

三本松：全然なかったですね。やっぱり牛の世話して、余震も続いているからどうなったか分かんないなって感じだったんで。

－じゃあニュースで津波とか原発事故とかというのは、その時点ではあまり分かってなかったんですね。

三本松：その時はまだ分かんなかったですね。

－そして、12日に消防団の招集があったと。

三本松：自分が行った時にはもう消防団の活動が一通り終わって。消防団で行ったとしても泥だらけの中を積載車で走れないんで、結局、遺体を見つけたとしても毛布かぶせるだけしかできないんです。そし

て、自分たちも避難する準備、という形だったんですね。

## ★大砲のような爆発音

ー当時、原発事故が起きていたことについて、その当時ご存じでしたか。

三本松：あんま覚えてないんだけど、何かちょっと原発煙吹いてて、怪しいぞっていうのをテレビとかで確認しました。それで自分も「これ危険なんじゃないの？」っていう話になって、妻の実家が原町なんで、子供と一緒に避難させました。実際、原発事故起きた時、牛の世話しなきゃなんなくてここに残ってたんですけど、その当時って、ここ、生活音一つもしないんですよ。鳥の鳴き声とか、動物とか、そういった気配が全く聞こえなくて。自分たちが出す車の音とか機械音ぐらいしかしなかったんで、あんまりにも静か過ぎるんで逆に何が起きてるかっていうか、映画の世界みたいな感覚。

ー三本松さん自身は、12日か13日ぐらいから避難されたんですか。

三本松：自分が避難した時は、何日の爆発だったかな、お昼頃爆発した(3号機 3月14日 AM11:02)。あの爆発音がここまで聞こえたんで。ここ、原発から直線距離で15キロなんですけどね。牛の世話してる時に、でかい大砲みたいな、空砲みたいな音が聞こえたんで、「これは何かおかしい」と思ってテレビつけたら、爆発しましたっていうのがちょうどニュースで流れてたんです。爆発、イコール、チェルノブイリというイメージがあったんで、「これはもう、ここも危険だから避難するしかない」という話は父とか母に言ったんですけど、「そんなことでびびってんだったら、もうさっさとどっか行け」みたいな感じに言われて。

ーじゃあ、お父様とお母様はここにまだ残ってらしたんですね。

三本松：まだ、ここに2日ぐらい残ってたのかな。その当時、朝にはもう近所の人は全員いなかったんです。自分たちしか残ってなかったって形で。

ーそうだったんですね。原発の爆発音は、結構大きな音だったんですか。

三本松：そうですね。実際、震災後、戻ってきてから鹿島の友達とかに話聞いたら、あそこでも音聞こえたって言ってたんで。その友達も消防団入って動いていて、自分たちは津波とか被害受けなかったから残ってたから、空からもすごい音が聞こえたって言ってました。

## 3. 避難生活

### ★避難と助け合いの場

ー爆発音を聞いて、三本松さんご自身も避難しようと決断なさったんですね。最初は原町に行かれたわけですか。

三本松：はい。

ー避難してからも牛を見に、小高に時々いらしてたんですか。

三本松：うちの親が諦めて避難するまでまだ時間あったんで、私が子どもらと合流してから、避難先を福島市方面に決めたんですね。上の子が心臓悪かったんで、心臓の薬とかもらうんだったら福島医大まで行かなきゃなんないし、担当医がそこにいて。他の県外に行ったところで知り合いとかも親戚もいなかったんで、とにかく西に行くしかないってことで。取りあえず子どもと合流してから、飯舘の今の消防署がある場所の周辺に避難して。そこにテレビとかあって、避難した人たちと一緒に状況確認のためにテレビ見ながら。あの頃だと携帯電話つながらなかったんで、固定電話で交代で電話をかけて、たまたまうちの親とつながって、「避難したほうがいい」って言ったら、「もう諦める」って言って。その日の夜かな、うちの親も軽トラックに家財道具ある程度積んでから避難してきたって形ですね。

ーそれが何日ぐらいですか。

三本松：多分、自分が避難して2日後ぐらいの話だと思います。15とか16とか。

ー福島市での避難先として、何か当てがあったのですか。

三本松：なくて。取りあえず赤十字の人が避難所開設できたからってということで、一番初めに案内された場所があったんですけど、場所は（福島市）蓬莱でした。その体育館に避難したんですけど、そこは、「蓬莱だから福島市の人は受け入れすることはできけど、他の市町村の人は受け入れできない」っていう感じで言われたんです。それで、赤十字の人が別なところを探すって言って。それでその後、福島東高校の体育館が避難所として開設されたんでそこまで案内しますって言われて、そこからまた移動という形ですね。

ーそこへは、ご家族で行かれたのですか。

三本松：全員で。

ー避難所で困ったことはありますか？

三本松：東体育館に避難した時に、やっぱり余震になると子供がパニックみたいな感じで大声出してたんですね。だけど、東高校の高校生が昼に遊びに来てくれて、遊んでくれるだけでやっぱり子どもにとっては全然ストレスが違ったんで。そういうのはありがたかったですね。あと、下の子がちょうど離乳食始まった頃だったんですが、離乳食がなかったんで、うちの妻がご飯粒を指先でつぶしてのり状にして食べさせようとしてたんですけど、下の子が食べれずに泣いてて。それで東高校にいた時、近所の人がわざわざ自分とこで離乳食作って毎日持ってきてくれて、随分助かりましたね。

ーそういった助け合いの場でもあったんですね。

三本松：そうですね。ボランティア精神とかまでは言わないですけど、そういう人の親切心がああいう場ではやっぱり助かるっていう感じです。ああいう時に助けられるっていうのは、他の諸外国見ていると、日本人だからできるっていうところの面もあると思いますね。やっぱり災害とか起きると、強奪とかああいうのが多いらしいので。やはりその辺は日本人特有の共同で助け合うみたいなどこあるんで、そういう

とこが一番、今思うと納得できるかな。

—小高から避難したということで、スクリーニング検査はあったんですか。

三本松：ありましたね。自分たちは、その避難所へ行ってから受けてくださいってという話で、ちょっと場所覚えてないんですが、受けました。一通り、靴の裏とか、髪の毛とか、重点的にやられましたね。

—避難所となった福島東高校の体育館は、結構人が多い状態だったんですか。

三本松：福島東は結構後から開設されたんで、初めは人がそんなにいなかったんですね。その後に徐々に集まってきたんですけど、知り合いとか親戚んところに行くよなっていう感じで抜けてった人がいたんで、結構ぎゅうぎゅうで人でいっぱい動けないっていう感じではなかったですね。

—当手を振り返って、国への不満とか改善してほしい点とかはありますか。

三本松：それはやっぱり一番初めの SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測システム）が一番問題かな。多分発表したらパニックになるからっていつて発表しなかったっていう。発表しなかった時点で諸外国から逆に信用されなくなってしまう。どんな悪い情報でも、やっぱり発表すべきなのは発表すべきであって、そういったところは必要だっていうところが1つと。

あと自分たち避難した時、体育館の板の間で寝てたんで、体痛くてなかなか寝られないんですよ。その後、段ボールで作ったベッドとか、あと、プライバシー区切るために壁作るとかっていうのがあったんで、後のそういう教訓にはなったと思うんですけど、ああいうものはやっぱり市町村単位である程度常にストックしておくべきかなと思いましたね。

—その段ボールとかっていうのも、自分たちで全部やった感じですか？

三本松：特に福島県はそうなんだけど、そういう事故とかなかったから、自分たちで段ボール持ってきて部屋作ったりってあったんです。でも新潟に避難した人たちは、柏崎とかあっちのほうで事故とか災害あったから、（段ボールで部屋を仕切るなど）そういったところで仕切ったりとかそういうのがもうできてみたいなんですね。だから、もう（災害対策が）できてるとこ、できてないところってあるんで、やっぱり一度そういうことがあったのは県同士とか町同士で共有して、こういうことあった場合そういうふうにしたほうがいいっていう感じにしてっほうがいいのかな。

—避難所によって設備が違ったんですね。ご飯とかは足りてましたか？

三本松：自分たちんところに来たのは、関西方面から賞味期限が切れたコンビニおにぎり。3日とか4日たったようなやつで、まだ冬場だったから食べれるけども、それでもぼろぼろになって。それで、あとはカップラーメン食べてくださいって言われるんですけど、中のスープは捨てないでくださいと言われて。全部飲み干してくださいって言われちゃう。自分たち東高校の体育館にいて、その排水溝とか詰まると困るから、全部飲み干してくださいって。でも、ああいうしょっぱいもん、そんな。1人前なら飲み干せっかもしらん。それで子どもの分まで飲み干せなんていうのでできないんで、ほんとに。

—そうですね。トイレに流そうとしても、そのトイレが一番大変だったりしますからね。

三本松：自分たち避難した時はトイレがちゃんと動かなかったんで、プールからバケツに水くんで用意してやって。それで、トイレがちゃんと直るまでは、それを交代で使っていましたね。

ー東高の体育館にはいつ頃までおられたんですか。

三本松：あそこは4月、高校が始まる直前までいましたね。入学式とか始まって授業始まるっていうんで、その1週間くらい前までいました。その後に一時的に、福島市の荒川っていいましたっけ、山のほう。荒井小学校ってあって、そこに一時的に入って。その後、南相馬市が南会津町に避難者受け入れができたっていうことで移って、すぐまた転校っていう形で。

ーそうだったんですね。南会津に移られたのはいつ頃ですか。

三本松：その一時的にいた小学校はただ入学式だけ受けるような感じで、すぐに（南会津へ移動）だったんです。だから、4月下旬には移動してたって形ですね。

ー長男さんの入学式ですね。

三本松：はい。

ー小学校はお子さんの入る学校で、避難してたのは東高のままだったんですか。

三本松：あそこは福島市の山側にある建物。ふくしま自治研修センターって、そこんところが避難者受け入れてなって、そこから小学校に行って入学式が。その避難所も1週間しかなくて、そのまま南会津町のほうに移動したって形。

ーなるほど。避難所も移って。お子さんも入学式だけは福島市で、すぐ南会津に移ったんですね。

三本松：はい。

ー3月に、小高に戻って来られたりはしましたか？

三本松：その時はまだこっち戻ってこれなかったですね。

## ★知り合いのいない南会津へ

ーそうなんですか。そして南会津に避難なされた。これは、南相馬市が避難所を開設したんですか？

三本松：避難所開設っていう形で、多分、町長と市長がそういう提携して受け入れしてもらったんですね。自分の他にも、避難者を乗せたバスが移動してたんで。家族とかそういうの含めると全部で300人くらいいたんですかね。

ーじゃあ、結構南相馬の人が来たんですね。でも、小高から南会津は遠いですよね。

三本松：そうですね。標高1,000メートルの山登ってった先だったんで、この辺とだいぶ気候も違うような形だった。

—そうですね。南会津の避難先には、南相馬からいらしたお知り合いとか近所の人とかって周りにおられましたか？

三本松：いや、自分の知る限りいなかったですね。妻の知り合いは1人だけいましたけど。自分たちは避難先として、ペンションに受け入れしてもらったんですよ。妻の友達はホテルみたいなところ借りて、そこにいたってという形だったんで。

—なるほど。じゃあ、そこでようやく家族と落ち着かれたんですね。南会津に避難なさって、その年の秋に戻ってこられたと伺いましたが。

三本松：そうです。南会津町にいた時に、緊急雇用で地元の森林組合の人が雇うっていう話が出たんですね。職がないからどうなるか分からないから、自分はもうそこで働くしかないと思って。うちの父親も働くと言って、結局、小高出身の人6名だけがそこで働くってなりました。原町の人たちは、自宅が警戒区域の範囲外なので、もう家に季節の服交換しに行けっから、なんて感じで半分旅行気分だったんで。だから小高の人以外は、危機感あるっていう人は全然いなかったですね。

森林組合で働いたんですが、冬になると向こう（南会津）は雪深くて仕事もなくなるし、自分たちは雪国にそんなに慣れてない。だったら、多少危険であってもこっち（南相馬）の分かりきったところで働いたほうがいいからと考えて。9月下旬か10月に南相馬市内で就職あっせんの会を開くってあって、自分が行くって言って、こっち（南相馬）で職探ししたんですね。うちの親は、南相馬で働くなんて危険で頭おかしいやつのやることだなんて散々騒いだんですけど。

—それで南相馬に戻ってこられたんですね。

三本松：結局、こっち来ていろいろ職探ししたんですけど、ちょうど自分がやりたいような職とかそういうものがなくて。たまたま、こっちに残ってた自分の中学校時代の友人がNPOやってて、その理事長と知り合いが「今ハローワークに募集かけてるから、もし受けんだったらハローワークから（書類を）もらってきて」と（言われて）。「ただ、先着順だからそこら辺は早くして」っていう話で、3名募集のところで自分2番目ぐらいで入って一緒に働かしてもらうことになりました。実際のところは、話聞いたら、自分の友人がその理事長に頭下げて、「困ってっから助けてやってほしい」って言って、それで自分は友達に助けられた。

—南会津の森林組合にはどのくらいおられたんですか。

三本松：5月末から働き始めて、10月の半ばぐらいまで契約してやってたって形ですね。

## ★実際に測定してみても

—なるほど。そして秋に、お友達のNPOに就職なさる。放射線の測定を行ったり、地域の田畑の維持管理をしたりというお仕事だったと伺いました。

三本松：そうですね。県と市から放射線測定の仕事の入札を取ったのかな。それで3年間、その仕事をNPOでやるっていうことになって。南相馬全体をマッピングしながら、放射線測定を3年間やってって形ですね。初めは原町からスタートして、鹿島の一部のデータを取って、小高が解除になってから小高も

取るようになってって感じで。

—小高が2012年になって入れるようになったら、小高も測定を。

三本松：測定範囲に入りました。2人1組で3班に分かれて測定して、それで毎日。多分1班で20カ所近くあって、それを半日じゃできなかったかな。そのくらい時間かけて取ったってことですね。

—実際に測定してみて、何か感じられたこととかありましたか？

三本松：山際とかああいうところはちょっと高いんですけど、年数たつとやっぱり少しずつ下がっていくというのが目に見えて分かっていきましたね。あと、天候に左右されてちょっと変わったりするっていうのもありました。町なかはもうほんとに、要はほぼ危険ない状態なんですけど、やっぱり（色々と）情報を聞いているから、みんなして怖がってるみたいなどこあったんで。

—線量自体は、もう小高の町なかは低くて、高いのは一部ということですね。

三本松：山側のほんの一部だけでしたね。

—天候に左右されるということですが、雨が降った後とかは線量が変わるんですか？

三本松：雨で多分遮蔽（しゃへい）されるんですかね。（線量が）低くなるんですよ。晴れてると上がるみたいな感じで。小高で一番遠かったのは川房の公会堂の近くまで行って測ってたんで。

—そのお仕事を3年間やっておられた。その前、南会津にいらした頃に、小高へ一時帰宅はなさったんですか。

三本松：南会津にいた時は、多分こっちに帰ってくるまでの間に2回ぐらい戻ってきてますね。

## ★牛を残して避難

—ちょっと聞きづらい質問なので、無理にお答えいただかなくて大丈夫なんですけど、牛を置いて避難なされたじゃないですか。やっぱり大変だったんじゃないかなと思うんですけど。

三本松：逆にそこが一番重要で。初めは自分も、「牛このまま死なせるのかわいそうだから、解放して自由にしたほうがいいんじゃないか」って話は父に言ったんです。けど「他んところに行って他んちの前で牛死んだりしたら逆に迷惑かける」って話になって、「そう言われればそうかな」って感じで、牛舎の中に閉じ込めてったんです。ところが、動物愛護団体が犬猫の保護に来た時に、豚とか牛とかがいるっていうのが分かって、中にいる牛を解放してしまったんです。それで、テレビなどでも放送されたような野良牛とか、ああいう動物が逃げてるという感じになってしまったんですね。だからあれは、自分たちの責任じゃなくて、何も知らない動物愛護団体が勝手にやったことなんで。

—じゃあ戻ってこられた時には、飼ってた牛はもう全部その団体の人たちが勝手に放しちゃった後だったんですね。

三本松：そうですね。放した後に、今そこ（ブドウ畑の前）にトイレとシャワー室あるんですけど、そこ

に餌のタンクがあったんですね。何も知らないから（団体の人たちが）開放して中の餌を全部出しちゃったんですよ。そうすると、雨とかに当たると腐るじゃないですか。腐った後、虫が湧く。自分ん家の入り口、下り坂のあそこから、虫の羽音が全部聞こえるぐらい。だから、数えたら何億匹っていうぐらいの虫が湧いて、6月、7月の蒸し暑い時にブンブン飛んでてって感じでひどい状態だったんです。

—そうだったんですね…。飼ってた牛は、ある意味、どこ行ったか分からない状態ですね。

三本松：実際のところ、もう餓死して死んでる牛もいれば、逃げ出した牛もいて。避難したその年の確か9月か10月ぐらいに殺処分するってことになって、私は参加しなかった。うちの父親が立ち会って、牛、捕まえたやつ全部殺処分して埋めるっていうことになった。

—そうでしたか。一時帰宅の時は、三本松さんと、あとお父様、お母様ぐらいでした？

三本松：私と父だけでしたね。

—なるほど。南会津から南相馬でNPOに就職したのが2011年の秋冬。その時のお住まいは？

三本松：原町の馬場にある母方の実家に大体1カ月だけいました。私は第6回だかの仮設住宅に応募して受かったんで。それで、（南相馬市原町区）桜井町の体育館の脇の、今、駐車場になってるところあるんですけど、そこに仮設住宅ができてたんで、そこんとこに後に家族で住むようになりましてね。

—仮設に移ったのは2011年の末ぐらいですかね。

三本松：11年の多分秋か冬ぐらいですね。

## ★仮設住宅へ

—仮設住宅へは、南会津にいらしたご家族みんなで移ったんですか。

三本松：うちの子どもらは小学校の学年変わる時に戻ってきたっていう形なんですけど。うちの親たちはこっち（南相馬）で子ども育てたりとか住むっていうのを大反対で、「そんなことやんの頭おかしいやつのことだ」「こっちで子ども育てたら、5年後ぐらいに子どもががんになって死ぬから。この人殺し」って散々言われたんで。

そこまで言われんだったら、もう一緒に住めないなっていうことで、学年変わる春、3月の時に全部引き払って、妻と子どもだけ連れて仮設に住むってことになったんです。

—じゃあ、その頃はお父様、お母様は南会津に。

三本松：南会津に残ってたんですけど、結局のところ、2012年の多分6月ぐらいだったかな。「宮城県の川崎町に中古物件買ったから」なんて言って。「どうなっか分かんないから、お金使わないように仮設住宅とかそっちのほうに住んだほうがいい」って言うのに、うちの父と母は、「そんな犬小屋みてえなとこに住めっか」って言って（仮設住宅に住み続けることを）拒否したんで。だけど、お金かかんないようにするためには、やっぱり最低限そういうとこに住んで我慢するしかないっていうことで、俺は「もうそういうことするしかないよ」って言ったんだけど、全然話聞かなくて。

南会津にいた時もそうだったんです。避難した当時、9月くらいまではペンションに避難してたんですけど、その後に県のほうで、「避難所もう閉鎖するからそれぞれ自立してください、アパートとかマンションとか借りてください」って話になったんです。でも南会津町はアパートとかないんで、空き家を個人的に言って借りるしかないって話になって。一応、向こうの村役場の人が、いろいろ候補になるところを紹介してくれて。昔使ってた教職員住宅。小さいんです。今からもう40~50年ぐらい前に建てられた古いようなやつなんですね。「そういうのがあるから、もし住むんであれば、村のほうでリフォームして住めるようにします」って話があったんです。

—そこに住もうと思ってたんですね。

三本松：自分の中では、(教職員住宅を)2つ借りて、うちの親世帯と自分たちが住めば、それぞれ住めるようになるんじゃないのって、お金もかからないって言ったんですけど。(父親が)自分のこと責めて。「結局、お前たちがそこに住んだら、布団は敷きっぱなしで煎餅布団にして掃除もしねえ気だろう」みたいなことをずっと責めて。「そんなところは駄目だ」って言って、結局、旅館の別館借りることにしちゃって。

旅館の別館借りるってなったらもう、電気の基本が200ボルトで高い業務用のやつになってて。24時間ボイラーでお風呂沸くから、400リッターのタンクなんかすぐなくなってしまいうんで。だから一番高い時で、光熱費だけで16万ぐらい飛んだ。

—ええっ。それは困りましたね。

三本松：だから結局、教職員住宅にそれぞれ住んでたら基本料金も少なくて済むし、電気代とか灯油代なんかも少なくて済んだはずなのに、「これで16万かかってるって高過ぎだろう」って言ったら、「家族全員で住めっからいいだろう」みたいな感じで言うてくる。いや、お金をできるだけ使わないような方法を考えずにどうすんだって話で。うちの親と自分はもう衝突ばっかりしてたんで、ほんとに行くたんびに。

—なるほど。2012年6月には川崎に中古物件をもう買ってしまって、そちらにお父様、お母様は住むことになった。

三本松：それもいろいろあって。あっちに買って住むってなったその年に、小屋木の区長から草刈り管理やってほしいって話が出て。田畑の草刈り、それをやってほしいって話で、大型のトラクターを持ってるのが、うちと他1軒、2軒ぐらいしかなくて。初めは川崎町からこっちまで来てやってたんですけど、結構距離があって、やって帰るのがつらくなって。結局のところは鹿島の仮設住宅を借りたんです。借りたことに関して、俺はものすごい怒って。「人には犬小屋でそんなところ住んでられっかって言うてた口、どの口で住んでんだ、人のことばかにしておきながら何で住んでんだ」って話で。もうその辺で全然意見も合わなくなって。

—なるほど…。桜井町の仮設には、いつ頃までおられたんですか。

三本松：確か、2017年ぐらいまでいて。仮設住宅を集約して1つにするってなった時に、イオンの脇にあった仮設住宅に移動してくださいってなって、そちらに移動になりました。2019年に原町に家建てて、やっと自分の建てた家に引っ越すことできたんで、それまではずっと(仮設住宅に)いましたね。

—仮設住宅は、地区とか地域とかもばらばらで入居していたという話も聞いたんですが、どうでしたか。  
三本松：地区とかもう関係なしに応募して、受かったかどうかで入ってきました。自分は桜井町いた時は仮設住宅の区長もやったんです。あれはもうみんなしてやりたがらなくて。それで、誰もやりたがらないといつまでたっても終われないっていう話で、自分がもう早く終わらしたくて、「じゃあ俺が1年間やるから、あとは任せた」って形で。結局、俺のやることに口出すなっていうことを条件に、全部、自分ワマンで決めてったんで。

—なるほど。じゃあかなり長く仮設暮らしをされたという感じになりますよね。

三本松：そうですね。だから、下の子はもうここの小高の実家は全然覚えてなくて、仮設住宅で育ってやっと今の家に住んでるって形なんで。

—隣の音も聞こえたりとか、不便だったりとかしましたか。

三本松：うちの小高の実家が築年数が古すぎて、仮設住宅のほうが逆に快適でした。断熱利いてたんで。ただ、結露はどうしても避けられなかったですね。あとは、子どもが大きくなるにつれてものが増えるっていうのと、やっぱり狭いところでものが増やせないっていうところあって。

#### 4. 親との対立をきっかけにワインへ切り替える

##### ★気が付いたら…

—ここで一度、今までの流れを改めて伺っていきます。NPOで2011年から2014年ぐらいまで働いてらしたんですね。

三本松：はい。

—機械をお父さまが処分しちゃったのはいつぐらいですか。

三本松：多分2013年ぐらいかな。

—タイミング的には原町の仮設にいらした時ですね。お父様、お母様も鹿島の仮設に住んでいらした時期。その頃に気付いたという感じですか？

三本松：そうですね。小高の（立入り）制限が解除になって、定期的に荷物の持ち出しとかやってたんですよ。それで、自分はこっちに戻ってきて補助金とか使って自分の酪農をもう一度やろうと思ってたんですね。ところが気付いたら、いつもある機械がないっていうのがあって。それで機械がないから牛舎の中見て回ったら、中にあったパイプラインってミルク通すやつとかが全部なくなってて。

—そういうのまでなくなっちゃった。

三本松：それでうちの親に電話したら、「鉄くず集める業者とか来たからその人たちにくれた」とか言っ

てて。「機械は?」「売った」なんて話。「何でだ」って言ったら、「もう(酪農を)やんねえだろ」とか言  
って。「俺がこっちに戻ってきてもう一回やるって言ってたのに、何で勝手なことやってんだ」って話に  
なって。それでさっきの、「後継者が欲しいわけじゃなくて、要するに作業員欲しかったんじゃないの?」  
っていう話をして、そこでものすごい衝突して。

結局、うちの親は「こうなったんだからサラリーマンやれ」ってまた言い始めて。その当時でもう 40  
歳過ぎてたんで、今更サラリーマンやったところで、給料の上がる見込みもないのに一から覚えて、子ども  
が大学行きたいってなった時にそれだけの金残せねえだろうと。それなのにどういことしてくれんだ  
って。だから、そこからほぼ仲たがいで、もう口も利かん。電話来たとしても全部着信拒否してたんで、  
ずっと。話すことなんか何にもないと。人には散々仕事やれとか俺の意見は何にも聞かなくせに自分た  
ちの意見だけ押し通そうっていう、そういう態度が気に入らなかつたから、もう何年も着信拒否してまし  
たね。

—そういうことも含めて、対立があったんですね。

三本松：ありました。結局のところ、ものの見方っていうか考え方なんでしょうけど。うちの親は、農業  
の後継者、酪農の後継者欲しいから代替わりすんだって言って、いろいろ仕事覚えさせてやってるって言  
う割には、重要な局面は俺のことはそっちのけで、話にも交ぜられなくてももう独断で決めてるっていう  
ことが俺にとっては一番許せないことでしたね。だったら、そんなことすんなよって。結局のところ、後継  
者が欲しかったんじゃないくて、ただ酪農やってくれる作業員が欲しかったんだらうって。

—なるほど...

三本松：重要な話は俺そっちのけでうちの親 2 人で決めてやってて、それで家族大事だとか後継者だ  
とか言ったって、全然言葉の重みがないっていう。そのことに関していまだに謝罪も何にもないし。だか  
ら、自分がブドウやるっていうことに関して、俺が自分で決めたことなんだから、うちの親たちに何か  
しと言われる筋合いはないって言ってたんで。うちの母親、仕事手伝ってくれっけど、いまだにどうせ失  
敗するって言うんで。

—三本松さんは大学で酪農の勉強しておられますし、別の土地で新たに酪農を始めようとは思わなかつ  
たのでしょうか。

三本松：やっぱり初期投資がものすごい大変なのよ。だったら、もう初めからうちの父親がやってたのを  
そのまま引き継いで、もっと規模拡大とか、もっと合理化するとか、もっと品質良くするとかっていう  
ほうが手っ取り早かつたから、他の土地で新たにやるっていうのは考えてなくて、ここでおっきくする  
ってしか考えてない。

—実際、小高の避難指示が解除になってからもう一回酪農をやろうと思ってらしたんですか。

三本松：機械とかがなくなつたの気付くまではやろうって思ってましたね。なくなつてからは、取りあ  
えず何か自分で会社起こして何か新しいのやるしかないなっていう。

それでもう別な道を考えてて。その時話題になつてたドローンの資格は取りました。

—もう一回酪農をやろうとか、ご家族を呼ぼうとかは、ご自身で線量を測っていらしたことも影響しているんじゃないですか。

三本松：自分はそんなに気にも留めてもいなかったんですけど、線量を見てると、やっぱり年々下がってるところはどんどん下がってるのは目に見えてたんです。要は山の中で何か採ってきたの食べようとかっていうことさえしなければ、多分住む分には問題ないと思ってたんで。

—線量が下がって、酪農ができると思ったのに、お父さんが勝手に…というのは残念ですね。

三本松：機械と、トラクターが多分2台と、トラクターに付ける他の機械を5台ぐらい処分されたんです。あと、牛舎の中にあったパイプラインとか一番重要なところが全部なくなってた。それが一番ショックでしたね。

## ★100年続く会社を

—ワインを始めようと思ったのは、2016年に山形のワイナリーに行ったのがきっかけのことですが、これは高島ですか？

三本松：高島ですね。

—観光で行かれたんですか？

三本松：家族旅行で（山形県の）加茂水族館に行ったんですよ。クラゲの水族館行った帰り道に高島ワイナリーに寄って、友達に山形のお土産ってということでワインを買って。そういや、小高でワイン造ってるって聞いていのがないなっていうのがあって、これ、こっちに持ってこれれば一番いいんじゃないかなって思って。それで、自分調べた時にはこの辺でワイナリーは相双地区ではなくて、自分が調べた前年度ぐらいに2,000本ぐらいの苗木を川内村で植えましたっていうことぐらいしか情報なくて。

—なるほど。

三本松：それで2017年だったかに川内村役場に行って。「南相馬市でワイン造りたいと思ってるんで、教えてもらえますか」って話をしたら、「こっちもスタートしたばかりで教えられることはないけど、ボランティアで参加してくれるんであれば、そんな時にいろいろ教えられる人はいるよ」って話。その時、山梨で1年ぐらいワインについて習った後、地域おこし協力隊に入って川内村のワインづくりのお手伝いに入ってた人がいたんですね。その方は、2018年に富岡に移って。「富岡で同じようなことやらないか」って言われて、富岡のほうでも一緒にやり始めて。

2018年の秋にワインの苗木を注文できたんで、19年の3月に受け取って、その月に苗木を植え始めたのが（コヤギファームの）スタートですね。

—機械はなくなったけど土地はあるという状態で、他に何かやろうという考えはありましたか？

三本松：いろいろ考えた結果がそうなんですけど、米やるにしても米農家はたくさんいるわけですよ。野菜農家になると、野菜って結構専用の機械って多いんですね。機械を買わなきゃいけないのと、技術とか病気とかも調べなきゃならないから。

だからといって酪農とか他の動物飼うにも、自分の年を考えると…。動物を飼い続けると 1 年間通しずっとその世話しなきゃいけないというのがあって、自分の体力の衰えも考えると、それもできないと。それで最終的に果樹をやるかってなった時に、果樹の場合だと、木を育てるのに大体 3 年ぐらい育ててから収穫って感じなんですわね。

ワインの場合だと、機械自体が小型で済むし、手作業が多いんで。たとえ自分が衰えたとしても手作業ぐらいだったらできるし、専用の機械もそんなに必要ない。必要なのは施設ぐらいだけだったんで。あと、周りを見たときに、(ワインを) やってるところが少なかった。川内や富岡から南相馬市の距離を見ると 30 キロぐらい離れてるわけだから。物理的距離が離れてれば、ワインを店舗に置こうとした時の競合にもなり得ないと思った。南相馬市から大体北のほうにワインをどんどん売っていくような感じで行けば独占できるんじゃないかっていう感じで考えて、最終的にお酒関係の中でもワインを選んだって形ですわね。

―なるほど、色々と考えて。高畠ワイナリーに行ったのもきっかけになって、ワインにしたということですね。

三本松：そうですね。あと、ブドウの木って結構長寿で、ヨーロッパとかオーストラリアの一部では 100 年超えてる木なんかもあるんですけど、そのまま残ってたりするんです。100 年超えた木からだけ選んで造ったワインなんかもあるぐらいなんです。たとえ自分がもう死んだとしても 100 年後残ってる会社であれば、多分ワイナリーだとそれが可能かなと思った。

## ★ブドウ農園のスタート

―最初は川内村でボランティアでお手伝いなさる中で、見よう見まねという感じですか。

三本松：そうですね。だから一番初め、ワイン用のブドウも生食で食べるブドウもブドウには違いないから、栽培はブドウの栽培の本買えばいいかなと思って。取りあえず本屋行って何冊か買ってひととお目通して、大体育て方ってこんなもんかなみたいなのでスタート、始めたってとこですわね。

―以前に伺った時には、YouTube も活用してるっておっしゃってましたよね。

三本松：初め、本だけで見てたんですけど、やっぱり本だけで分からない場所あったんで。そうしたら、ある時ブドウ栽培とかっていうので検索かけたら何人か(動画が)出てきて、春先にやる作業はこういうことやりますとか、ブドウの成長はこういうふうになるんでここでつる切りますとか、いろいろある程度出てたんで、それを見ながら見よう見まね的な感じでやりましたわね。

―元々は牧草地だったところをまず、整地したんですか。

三本松：一番初めに、ブドウが水分嫌うからってということで、暗渠を入れるところからスタートして。そのためにあそこにあるショベルカーを購入して、それで自分である程度暗渠の形にして。暗渠になるパイプとか入れて埋めて。あと、肥料。震災後この辺に農家とかもいなくなったんでホームセンターで肥料系のやつ買ってきて、結構混ぜ込んで。あとは、もみ殻燻炭(くんたん)。あれが土の栄養分とか、水の保湿とか、そういったのを細かくやってくれそうだなと思ったんで、ブドウの苗木が植わる辺りんとこに全部、

列になるよう土の中に埋めてって。そのあと、ブドウの苗木を 1メートル間隔に植えてったって形ですね。

—すごい。それを 1人でやられたんですか。

三本松：そうですね。その当時、知り合いが会社辞めてバイトで雇ってほしいっていうことあって、彼も独立するからっていうことでいたんですけど。4月から働いてて、個人事業主で7月から仕事始めたら仕事どんどん舞い込んできて、本業忙しくなったんで、1年たたないうちにもう独立しちゃった。

—あとのご家族とか。

三本松：母が手伝ってくれるんですけど、自分のお客さんに対して暴言吐くんで結構困ってて。あいさつして行くんですけど、「あの人は何者だ」とか聞いてくるんですよ。ただ単に郡山にあるワインの販売業者なのに、もう勝手に頭ん中で思い込んで、「あの人は自分とこでワイン造ってんのに、うちのブドウもらってく。何て卑しい人だ」とか。だから、あの人はただ単にワインの営業マンであって、自分でブドウ作ってるわけじゃねえって言ったりとか。

あと、自分のとこにワインセラー、今、店舗を造ってるんですけど、そこんところに入れるやつを、カタログ持ってきた営業マンと自分が打ち合わせしてて。日本製とか、ヨーロッパ製とか、それでこういうのありますよって話してる時に、電話かけてきてたまたま受け取ったら、「あの人、何者なんだ。あの人から物買うな」とかでかい声で言うから、相手に全部丸っと（聞こえてしまう）。相手、苦笑いするしかねえかったんだけど。だから、俺のお客さんに対して何言ってんだって話で。もううちの母はとにかく思い込み激しくて、勝手に何も説明しないのに、あの人はいい人、あの人悪い人みたいな感じでやっちゃうんで、すごい迷惑なんです。

—今、下で作業されている方はパートの方ですか。

三本松：いや、うちの母もいます。今日はボランティアで2人来てくれて、あとうちの妹とアルバイトの従業員とうちの母がいるんですけど、うちの母が一番問題起こしてる。

—製造とか販売とかは、順調に進んでいらっしゃいますか？

三本松：人手が足りなくて。自分この他にも、夏、半年間だけ農水省の仕事で、田畑の草刈り管理をやってるんですね。草刈りやると大体 1カ月ぐらいかかっちゃって、その時だけちょっと離れるんで、そうなるをやっぱりその間のブドウの管理がうまくいかなくて。その結果がこれなんですね（ブドウを手取る）。

—形とかですか。

三本松：そう。本当だったら、ブドウのつるをもう少し丁寧に管理すると、1つの房に固まりでグッてなるんですね。それがうまく管理できてなかったから、1つの、たくさん房になるとまばらに実がなって。栄養価が足りないと脱粒しやすく、ちょっと振ったりすつと身がぼろぼろと落ちちゃったりするんで、そういうところが自分がちょっと管理行き届いてないっていうとこなんで。本来ならもうちょっとブドウの皮も黒くなくちゃなんないし、糖度も上がってなきゃいけないんだけど、糖度が足りないからちょ

っと薄紫みたいな感じになっちゃって。そういうやつを集めてワインにすると、やっぱり糖度が低いし、赤ワインにならないよって言われて。この間ブドウを川内村に持ってったんですけど、自分担当してる方にちょっと1時間ぐらい説教食らって。もうちょっとブドウにちゃんと世話しないと、いいワインが造れない。そうするとワインが売れなくて、結局、売れないワインが在庫として残ると。要するにワイナリーとしてやっていけなくてつぶすことになるから、そこだけ徹底してくんねえと困るって話で言われて。言われて当然かなって思ってた。

ーなるほど。ちなみに、奥様やお子さんと一緒に協力して応援してくれる感じですか？

三本松：妻はやっとなり腰上げてちょっと手伝ってくれるんですけど、いまだに収穫の時ぐらいしか手伝ってくれなくて。自分が仕事の流れ覚えてても、妻が覚えてくれなきゃ困るわけなんです。例えば自分が交通事故遭って動けないとか、急に心臓発作で死んだとかあった時に、何もできませんじゃ、自分たちが生活する糧がないわけだから、それはそれで困る。覚えてくれって言うんだけど全然やってくれなくて、うちの妻の兄貴から3時間ぐらい説教受けて。義理兄のほうが東京のほうでお店やってたんですけど、その辺をいろいろ相談して。かなり強く言ってくれて、やっとなり腰上げてくれるようになりました。



## 5. ワインと今後の展望

### ★初めてのワインができるまで

ー2019年に苗木を植え始めて、最初に収穫できたのはいつですか？

三本松：一番初めに収穫できたのは、植えた次の年だったんです。ブドウの世話の仕方があやふやでちゃんとできなかった時に実がなって、その実をどうするかっていう時に、たまたま知り合った方がいて。その方は川内村で醸造担当してる方なんですけど、日本全国のワイナリーとかワイン造ってるところ回っていろいろ勉強してる方だったんで。その方がたまたまその年の3月と7月に訪ねてきてくれて、「この実どうするんですか」ってなった時に「どうするか決めかねてます」って言ったら、「じゃあ、試験醸造してみませんか」っていうことで。岐阜の恵那市にある恵那峡ワイナリーさんに、タンクのスケジュールを確認してもらったら、空いてるから受け入れられるっていうことになったんで、その年の秋に2週にわたってトラックで恵那市まで持ってきた。

ーじゃあ2020年には、もう試験醸造のワインができたんですね。

三本松：そうですね。でも結局のところ、ブドウの色が足りなかった。赤ワインにはできないけど、ロゼっていう触れ込みで造りましょうっていう話でロゼワインにして、その時で九百何十本かできたって形ですね。

ー苗木を植えて翌年にはもうワインができてるって、ものすごいスピードですね。

三本松：本来なら、ブドウ3年育てて3年目以降のブドウを収穫して試験醸造して、それでファンをつけて、そのさらに3年後ぐらいに自分たちの醸造所建てていくというのが流れなんですけど。生活がかかっているんでなりふり構ってられないんで、取りあえずワインができたっていう実績が欲しかったっていうのも事実で。ただ、その技術を上げていかなきゃいけないっていうのも確かであって。実際やってみると、やっぱり本で見るのと実際やるとはかなり差があったって感じです。

ーその後もずっとワインを造っておられて。ブドウの本数も、ワインの本数も順調に増えてる感じですよな。

三本松：そうですね。今年は白のシャルドネが900キロぐらい採れたんで、ボトル換算で多分750本くらいはできんのかななんて思ってるんでね。

ー今植えている品種は何ですか。

三本松：シャルドネとメルロー、カベルネフラン、マスカットベリーA、ブラッククイーン、甲斐ノワール、甲斐ブランですね。

ーいっぱいありますね。品種を選ぶ基準はあるんですか？

三本松：選ぶ基準は、ヨーロッパ品種系統約半分、日本の品種系統半分って形ですね。

ーヨーロッパ品種と日本品種の違いって何ですか。

三本松：ヨーロッパの品種の中でも、国際品種って呼ばれてる規格があるんですね。それは、ヨーロッパで販売する時にラベルに品種名記入できかどうかにかかっている。メルローは国際品種規格で登録されているから記入できるんだけど、外れてる品種は、ヨーロッパで販売する場合、品種名を記入できない。ただ「ブドウ」とかってそんな感じ（の記入になる）。だから、ヨーロッパの中でもメジャーな品種をできるだけ選んでます。やっぱり将来的に海外展開考えた時にそれが必要になるっていうことと、欧米人はどちらかというとワインに慣れ親しんでるんで、メルローとかシャルドネっていうのは、もうメジャー品種だから飲み慣れてるんですよ。どんな味かとか、どこで造られたやつはこんな味だっていうの分かるわけ。逆に、マイナーなブドウとかっていうのは分からないから、この土地に行ったらこういうの飲んみたいっていう可能性があるんで、外国人が来た時にそういうのも飲んでもらおうかなと思って、半分は日本の品種にしてる。あとは選んだ品種もラベルに合わせてとかっていうの考えてる。例えば、赤と白の甲斐ノワール、甲斐ブランでセットで販売する時に、ラベルを甲斐犬で赤と白で。ラベルの犬を阿形（あぎょう）とか吽形（うんぎょう）みたいな、あうんとかこま犬とかってイメージにしてセット販売するにも、そういう形でもいいのかなと思って品種を選んだ。ブラッククイーンっていうのは、品種自体が日本で作られた名前なんだけど、QUEEN っていうバンドに『マーチ・オブ・ブラック・クイーン』っていう曲があるから、それに合わせたラベル作ってもいいのかなって思って、そういう選び方もしてる。

ー一番最初に植えた品種は何ですか？

三本松：最初は、マスカットベリーA とメルローとカベルネフランの3品種。翌年に、シャルドネとブラッククイーンと甲斐ブラン、甲斐ノワールって増えましたね。

ーまだ、ワインの卸売りはできないんですか？

三本松：そうです。一応予定だと、来年の春から初夏にかけて（卸売りの免許を）取得できる予定ですね。今は、直接ここに来たお客さんに売ったりとか通販で売るとはできるけれども、コヤギファームが卸業としてどっかの酒屋さんに卸すのはまだできない。税務署からは3年間の実績が必要と言われてます。結局、国のスタンスとしては、お酒関係は大企業がやればいっていいということなんで、条件がかなり厳しいんですね。お金持ってるどころとか、ある程度上手にやりくりできる人じゃないとできないっていう感じで。だから、初め小売りで実績作らないと卸の免許取れない。もしくは卸の免許を持ってる人を雇えば、もうその場からできる。

ーなるほど。卸ができるようになると、例えば道の駅に置いてもらったりできますよね。

三本松：そうですね。あとは、ふるさと納税品とかでもできるようになります。

ー販路が一気にぐっと広がりますね。

三本松：広がります。今のところは、この近くの飲食店か、直接買いに来てくれる人か、ネットで直接購入してくれる人がメインなんで。昼間作業していて夜お店に営業行くととなると、やっぱり年のせいか疲れちゃって動けないんですよ。夏に何軒か回りましたが、やっぱり行くととなると、ただ買ってください

っていうわけにもいかないんで、向こう行って飲みながらマスターと話して、うちでこういうの造ってるんですがどうですかって話で流れに持ってって、良ければお店で置きませんか、買いませんか、みたいな感じで、こういうやりとりも必要なんで。基本的には、もうバーとか居酒屋で興味あるところは買ってくれています。

—いずれは海外に進出することも考えているんですか？

三本松：海外まで売り出すには、多分、俺はもうその頃いない可能性はあるんだけど、この小屋木地区の田んぼの基盤整備で5ヘクタール土地借りることになってるから、1ヘクタール大体4,000本植える予定なんで、2万本とかになると国内だけで売っても余るくらいなんで。そうなった時に海外展開は考えなきゃいけないかなって思ってる。

—日本のワイン消費量ってそんなに多くないんですか。

三本松：ワインの種類によって売れる、売れないがある。あと、そのワイナリーに固定のファンがついてるかどうかによって違うんで。日本だと多分、スパークリング、白、赤、ロゼぐらいの順番かな。一番はスパークリング系統が売れてるみたい。だから、やっぱりスパークリング好きな人はスパークリングだけしか買わないとかってことが多い。ただ、ワインの場合、赤とか白があるから、そこでワイナリーが赤白売ってる場合だったら、大体赤白セットで買ってくっていうのも多いんで。そういうことを考えると、本来ならば赤と白大体半々くらいで造って、それに合わせてっていうのが一番理想だったかな。ただ、ブドウの選択の中で、白ブドウのシャルドネっていうのが一番メジャーで一番売れてるやつなんで、他の品種をたくさん作るより、とにかく白をたくさんシャルドネだけで造って、半分は白ワイン、半分はスパークリングに変えてしまえばいいかなと思ったんで、シャルドネ1つだけにした。

—三本松さんのワインを調べた時に、Camouflage という名前で、アウトドアでカジュアルに楽しむというコンセプトだと拝見したんですけど、そういうコンセプトになるに至ったきっかけはありますか。

三本松：ワインのラベル作る時に、初めは馬とヒバリのデザインだったんです。そんな時に復興庁の専門家派遣制度で来てた方から「馬と鳥の柄ですか」って聞かれたんですよ。その人が言うには、馬とか鳥のデザインっていうのは100のワイナリーがあったら100個ある、ありきたりのデザインだと。だから、ここで100個鳥の柄のデザインのワインボトル置いた時に選ばれるかどうか。決める時に第一印象で勝るかどうかも戦略の1つだって言われて。それ言われてから、もっと別なやつとか、もっととがったデザインでもいいよっていう話になった時に、アウトドアとかそういう系統好きだったので、迷彩柄とかっていうのがないっていうので迷彩柄にして。あと、うちの会社がコヤギファームという名前だったんで。これ地域の名前（小屋木）なんだけど、聞いた耳からの情報だけだとヤギがいるっていうイメージだった。だから、ボトルんどこに一番初めがかでかとヤギのデザイン入れたんだけど、2年目以降はちょっとちっちゃいヤギのデザイン入れたって形です。それで、そのヤギのデザイン自体がそうなんだけど、うちのラベルデザインで2匹ヤギが載ってたら、2品種混ざってるブレンドだっていうこと分かるようにしてあります。1匹しか描いてない時は1品種、100%になってる。

—なるほど。ブドウ農家を始める際に食用のブドウと醸造用のブドウの違いをご自身でお調べなされた

と仰ってましたが、何が違うんですか。

三本松：醸造用のブドウはどちらかというと粒が小さくて、1~2グラムが基本的で、一番理想的なのは、水分が少なければ少ないほど実がぎゅっと締まってるもの。というのは、ヨーロッパは夏が雨が少なく乾燥してるっていう感じなんで、それで醸造用のブドウは小さくて実が締まってるほうが理想だと。日本とか東南アジア系は夏よく雨降るんで、水分含めば含むほどどっちかっつうとおっきタイプに変わっていくんで、そういうのは生食のほうが適してる。だから、シャインマスカットとか、巨峰とか、ピオーネとか、そういったやつは比較的実が大きい。ただ、そういうやつは食べる分にはいいけど、ワインにした時おいしいかどうかっていうと、合う、合わないの違いがはっきり出てくる。完全に合わないっていうわけではないけど、やる人も基本的に少ないって感じ。ただ、オーストラリアだと巨峰使ったワイン造ってるところあるみたい。

ー今は醸造用の品種でワインを造っていらっしゃるんですか？

三本松：醸造用が基本だけど、マスカットベリーAっていう品種は兼用品種。あと、ブドウによって糖度の上がり方が最大どのくらいまで上がるかっていう違いもあるし、西日本で作るのと東日本で作るのでは糖度の上がり方とか酸度の下がり方かっていうのも違いが出てくるんで、その辺はその土地とか気候によって全く変わってくる。西日本でこのシャルドネを作ります、東日本でこれを作りましたって、同じシャルドネでも味とかが全然違うくなるんで、それがまたワインの楽しみ方の1つなのかな。

ー南相馬ワインのここが強みだっているのはあるんですか。

三本松：そういうこと強く言いたいけど、今んとこまだ自信ないな。ただ、今は南相馬の食材とか地域の特産物に合わせてワインを売り込みたいと思ってるんで、相馬牧場のラム肉と合わせて、今年の7月に、集まった人にちょっと振る舞ってみてどうですかみたいな感じはやったんです。その時は結構好評でした。

ーインタビュー記事で、雇用の場を生みたいと仰っていたのを拝見したのですが、これからはコヤギファームで雇用を生み出していきたいと考えていらっしゃるんですか。

三本松：多分この仕事って俺一人とか今いる人数だけでできる話じゃないんですね。結局、地域活性化とか狙うのであれば、地元の人雇用して地元の人のためにやっていくことが重要なとは思ってる。だから、自分の考えでは、ブドウ栽培を相馬農業（高校）でやってもらって、相馬農業でブドウを作って販売するとか。あとは高校に醸造科みたいなのができて、高校でワインを造る場を科として設立してもらいたい。それを設立して、そこで覚えた人が、例えばテクノアカデミーでソムリエ科とかできて、そこで勉強すれば、ホテルとかバーでも働けますとか。あとは、ここ（コヤギファーム）じゃなくても他のところでも働けますとかっていうふうになっていけば一番理想かな。

ー確かに地元の高校で、ワインは今まで聞いたことないですね。

三本松：山梨には高校の科で醸造科があって、それで修学旅行で実際フランスとかドイツ行って、向こうの本格的なワイナリーで勉強してくるっていうのがあるんですね。あと、山梨大学のほうではやっぱり醸造科あって、ワイナリーやりたい方はそこで勉強して、卒業してからワイナリーで就職して、確か2年

か3年そこで働いた実績がないと最終的なワインの技術認定ってもらえないことになってるんで、向こうはかなり厳しくやってる。

ーそうすると、また、そういったワインの醸造所を自分でも持ってみたいと思う人が南相馬で増えていくことも考えられますよね。

三本松：そうですね。ただ、ワイナリー持つ時に酒税っていうの払わなきゃいけないんですよ。1キロリットル8万円の税金払う。ワインの場合、果実酒っていうことなんで6キロリットル48万円払わなきゃいけないんですけど、その最低6キロリットルを3年だか下回っちゃうと国から指導入るんで、それにならないようにしなきゃいけない。ただ市のほうで国に特区申請してもらると、その税金48万円を16万円まで減らすことができる。それをやるとかなりハードル下がるんで、そのハードルが下がらないと、多分やりたいっていう人が出てこない。その辺はやっぱり行政の力とか必要なんで、協力仰がないと難しいところも出てきますね。

ーワイン特区みたいな感じですか。

三本松：そうですね。実際、ワインっていうのも、ブドウに限らずフルーツワインっていう言葉もあるんで。福島県で例えるのであれば、モモが有名だからモモでワイン造るっていうこと可能だし。あと、南相馬だけじゃなくて、この辺の家だったら1軒に1本くらいユズとかなってるわけだ。ユズを加工してワインにするから、例えば、1キロで300円で購入します、で集めて、ユズワインなんてのも可能。実際、スペインだとバレンシアオレンジのワインなんていうのがあるんで。グレープフルーツで造ったワインなんかも販売したりしてるんで。そういうブドウ以外のやつでも可能性はあるとは思う。

## ★自分が納得できたら復興

ー復興は何をイメージしていますか。元に戻すのか、より発展させるのか。

三本松：復興は、個人が納得できた時点で復興だと思って。だから中には、もっとここに建物ずっと建ててほしいとか、もっとお金欲しいっていう人もいるわけだ。だけど、そういう人たちって際限なく言い続けるから。自分が納得できるとこまでいったら、もうそれは復興したって思うしかない。行政からすると、建物建てて住民戻ってくれば復興したって言うけど、多分それはもうあり得ない話だから。だから、今、もう（震災から）十数年たってるから、「避難した先から戻ってきてください」なんて言ったって、子どもたちも大きくなってあっちで知人とか友達できてるわけだから、そうした人たち（避難先でできた友人）と切り離すなんてできないじゃないですか。

だから、そういうことになると、親は自分たちが年老いたらこっち戻ってくっけど、子どもたちはそっちはそっちでとかってそういう話になっちゃうから、その辺はもう難しいところで、個人が納得したとこでやっぱり復興は終わるって形。自分は、ブドウ畑造って、ワイン造って、ワインを使って町の活性化につなげられたらいいなぐらいに考えてる。取りあえず自分の中で家族養っていった延長線上に町の復興があるってだけの話。

ーなるほど。

三本松：だから、中にはよく言う人いるんですよ。町の復興のためとか地域活性化のためって言うんですけど、俺の中ではそれは詭弁であって。家族が納得して家族が幸せに暮らしてそれ（街の復興や地域活性化）ができてるんであればそれはいいことだけど、家族が納得してないのにそういうことにばかり力入れてる人いたら、それってどういうことだって。何か順番逆じゃないのかなって思う。

ー最後に。学生たちに伝えたいメッセージについてお聞きしてもいいですか。

三本松：俺が学生の頃では、今と違って夜中遅くまで酒飲んで遊んだっていうの多かったけど、今の学生さんのほうがほんとに大学生らしいなと思ってる。全然違って真面目に勉強してると思う。ほんとに。ただ、やっぱり社会に出ると、大学で習ってきたのが全然通用しないとかもある。一つ言えるのは、何か目標決めたらとにかくやり抜くこと。それができないと多分通用しないかなと。それぐらいすかね。あとは、皆さん将来的にどうなるか分かんないけど、どっか大企業に勤めたり地元就職したりとかってなって理不尽なこともあるかもしれないけど、やっぱりその悔しさをばねにやっていくことなんかも重要になる。学生は学生時代で楽しんで、社会に出たら社会の厳しさを知るんで、あとはそれに負けないようになってだけ。

ーいま、一言一言に重みを感じています。ありがとうございました。

三本松：ブドウ食べて、ちょっと糖분을補給してください。

一同：ありがとうございます。

## 【学生の感想】

今回三本松さんにお話を伺った中で「復興は個人が納得すればよい。政府の言う復興と市民の思う復興は異なるため、いくら対策しても文句を言う人はいくらでもいる。」という言葉が印象に残りました。それぞれの考えが違う中で、それを割り切り自分の意見を持っている。また、家族を守ることを大切にして復興を考えているということが伝わってきました。

行政政策学類1年 大竹統也

震災・原発事故を乗り越え、南相馬初のワイン農家となるまでに、三本松さんがどのような経験をしてきたのか、そのお話を聞くことができよかったです。原発事故の後に放射線量を測っていたからこそその考えを聞くことができたことが印象に残っています。また、何度かブドウ畑での作業を手伝わせていただいたことも良い経験になりました。三本松さんの展望は明るく、その思いが多くの人に伝わってほしいと考えました。

行政政策学類1年 發田紗織

震災・原発事故を通して周囲に反対されても「ここで前に進んで生計を立てる」と決意し、自らの足で様々な事業に参加していく中で新しい仕事の糸口を見つけ、どうしたら独自性を見出せるか考えて積極的に動く熱意・行動力にとっても感動しました。「何か目標を見つけたらとにかくやり抜くことが大切」、自身が様々な困難に当たって来たからこそその三本松さんのメッセージをしっかりと受け止めてこれからの人生をより良いものにしたいです。

食農学類1年 関口実和

以前は震災のイメージとして政治的なマイナスな部分しか考えていなかったけれど、今回のこのインタビューを通して震災に対してのイメージが大幅に変わりました。震災の裏には互いを思いやり助け合う優しい人と自分のことしか見れていない人など、震災は人間の心の中が露骨に現れる瞬間でもあるなと感じました。また三本松さんはインタビューを受けているあいだ笑顔が多く、これからの未来について話している時、凄く楽しそうな表情で、震災を乗り越え、今は前に向かって歩き出しているのだと深く感じました。

食農学類1年 綱島和樹